

平成 24 年度文学研究科共同研究経費申請書

研究代表者 (申請者) 氏名	市 大樹	専門分野・ コース名	文化形態論・ 日本史学	職名	准教授
研究課題名	日本古代文物を対象とした日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究				
研究目的					
〔研究の目的、その意義と予想される成果、新規科研費獲得に向けた準備状況などを記入してください。昨年度科研費を申請して不採択になった場合は、研究継続・再申請準備状況も記入してください。〕					
<p>〈研究の目的〉 本研究の目的は、日本史学・美術史学・考古学という異なる領域の研究者が、日本に現存する古代文物を対象に、共同で調査・研究をおこなう場を設けることによって、本学における研究・教育の活性化をめざすとともに、新規科学的研究費を獲得するための体制づくりを構築することにある。</p>					
<p>〈研究の意義〉 近代的な学問体系が成立し深化を遂げる反面、研究領域がますます細分化する傾向にある。申請者(市大樹)が専門とする日本古代史学(文献史)の場合、美術史学、考古学、国語・国文学、東洋史学、歴史地理学などの隣接分野と、研究対象の多くが重なっているにもかかわらず、研究領域の壁にさいなまれ、隣接分野の研究成果を十分に吸収・活用できないでいる。</p>					
<p>申請者は前任地の奈良文化財研究所において、考古学、建築史学、庭園学、動物学、保存科学など多彩な分野の研究者と一丸となって、飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城跡を多角的に研究するという得難い体験をした。その際に痛感したのは、それぞれの専門分野における研究の方法論を具体的に知ることの重要性である。<u>他分野の研究成果のうち、都合のよい部分だけをつまみ食いするのではなく、方法論にまで深く立ち入って、長所のみならず弱点も十分にわきまえた上で、その研究成果を積極的に活用していく必要がある。</u></p>					
<p>こうした意識をもって本学に赴任したところ、前任地が大阪市立美術館であった藤岡穰教授(東洋美術史学)、国立歴史民俗博物館・奈良国立博物館であった高橋照彦准教授(考古学)も同様の意識をもっていることを知った。幸いにも、3人の研究対象とする時代は重なりっている。そこで、3人を核として、日本古代文物を共同で調査・研究する場を設けることによって、新たな日本古代史像の提示に向けた布石を打ちたいと考えた。申請者の知るところ、<u>日本史学と考古学の領域横断的研究はいくつかみられるが、東洋美術史学をも加えた領域横断的研究はほとんどなく、新たな視点に立った研究を発信できる可能性を秘めている。</u></p>					
<p>〈予想される成果〉 日本史学・美術史学・考古学の領域横断的研究は大阪大学で初めての試みとなるため、1年間の共同研究で顕著な成果をあげることは難しいかもしれない。だが文物を共同で調査・研究することによって、それぞれの専門分野の研究方法を相互に知ることができるメリットは大きい。現在3人は、それぞれの立場から、いくつかの研究プロジェクトに参画している。<u>今回の共同研究を出発点として、それぞれの研究グループと協力関係を結び、新たな共同研究の組織をつくりあげ、新規科学的研究費の獲得をめざしたい。</u></p>					
<p>今回の共同研究は、教育面でも大きな成果をあげることが予想される。本学の現行のカリキュラムでは、日本史学・美術史学・考古学の共同授業はまったくなく、それぞれの専門分野の研究の現状や方法論を学ぶ機会はほとんどない。この弊害を克服するための第一歩として、2年前から毎月1回のペースで、日本史学と考古学の院生・学部生を中心とする合同勉強会「歴史媒体の差異をめぐる史論会」を開催している(8月からは東洋美術史学の院生も参加する予定)。今回新たに共同研究を新たに立ち上げることによって、この合同勉強会をさらに発展させることができるとともに、この2年間ではできなかつた現地での文物の共同調査によって、実践的な技術を学ぶ場とすることができる。こうした試みを長く継続することによって、<u>領域横断的な視点をもつた研究者を養成することができると期待される。</u></p>					
<p>〈新規科研費獲得に向けた準備状況〉 共同研究者の一人である藤岡教授が研究代表者をつとめる基盤研究A「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」は、美術史、考古学、文化財科学の領域横断的な研究であり、高橋准教授もそのメンバーの一人である。同科研は、今年度が最終年度であり、<u>今秋にはこれを継承発展させた新規科研の申請を計画している</u>。新たな申請においては、古代史分野の研究者にも協力を仰ぐ予定であり、今回の共同研究をその準備段階の一つと位置づけている。</p>					

研究計画・方法

[研究計画・方法を具体的かつ詳細に記述してください。また、研究経費（4ページに内訳を記載）の必要性・妥当性を明確にしてください。]

〈研究計画・方法〉

(1) 月例会の開催

合同勉強会「歴史媒体の差異をめぐる史論会」を原則として毎月1回開催する。これまで合同勉強会を中心的に担ってきた中久保辰夫助教（文学研究科、考古学研究室助教）にも研究組織に加わってもらい、さらなる会の充実につとめる。この会では、これまでどおり、各専門分野における研究の方法論を学ぶ点に重点をおくが、下記の(3)(4)の調査にともなう事前勉強会などもあわせて実施する。

(2) 特別例会の開催

12月頃に特別例会を開催し、第一線で活躍する外部の研究者を講師として招聘する。講師として予定しているのは、日本古代史（文献）が専門であるが、美術史学・考古学・国語学の分野でも研究実績のある、東野治之氏（奈良大学教授）である。この特別例会では、最新の研究成果を吸収する場とともに、領域横断的な研究をさらに発展させるための方法論などについて議論をおこなう。

(3) 京都国立博物館での文物の調査

2012年は『古事記』が成立して1300年目にあたる。それを記念して、京都国立博物館で特別展「大出雲展」が開催される（7月28日～9月9日）。この特別展では、最古の『古事記』写本、鰐淵寺が所蔵する飛鳥時代の觀音菩薩立像、荒神谷遺跡出土の銅劍・銅矛・銅鐸、出雲大社境内遺跡から出土した宇豆柱をはじめ、数多くの古代出雲関係文物が出展される。そこで、京都国立博物館の淺漱毅研究員にも研究組織に加わってもらい、展示品を共同で調査にあたる（浅漱毅研究員にはすでに了承済み）。さまざまな文物を、それぞれの専門分野の教員・研究員・院生・学生がじっくりと観察し、实物に即しながら意見を交わすことによって、各研究分野の到達点・方法論を確認する場とともに、新たな視点を得るための場としたい。

(4) 出雲地域（島根県）の現地調査

(3)で実物調査する文物が、いかなる歴史的環境のもと、それが現在に伝来するにいたったのかを考察するため、11月頃に出雲地域のフィールド調査を2泊3日の日程で実施する。現在のところ、以下の調査先を考えている。また、現地で研究成果をあげている研究者の協力を仰ぎ、最新の研究成果を吸収するとともに、相互に意見交換をおこなうようとする。

【1日目】古代出雲歴史博物館（出雲市）の所蔵する展示品の実物調査、すぐ至近の出雲大社の現地調査をおこなう。古代出雲歴史博物館の平石充氏もしくは森田喜久男氏に協力を要請する予定。

【2日目】出雲弥生の森博物館・荒神谷博物館（ともに出雲市）の所蔵する展示品の実物調査、鰐淵寺の現地調査、出雲市域の発掘調査地の現地見学などをおこなう。出雲弥生の森博物館の花谷浩氏に協力を要請する予定。移動の際にはレンタカーを使用する。

【3日目】八雲立つ風土記の丘資料館（松江市）の所蔵する展示品の実物調査をおこなう。資料館の近辺は、岡田山古墳群、出雲国府、四王寺跡をはじめ、数多くの古代の史跡が密集している。資料館に備えられているレンタサイクル（無料）を活用し、古代の史跡を中心に現地調査も実施する。八雲立つ風土記の丘資料館の高屋茂男氏に協力を要請する予定。

〈研究経費の必要性と妥当性〉以上の研究計画のうち、(2)特別例会での講演料、(3)京都国立博物館での調査にともなう交通費・参観料、(4)出雲地域での現地調査（2泊3日）にともなう交通費（レンタカー2台分の代金も含む）・宿泊費、博物館参観料などが必要となる。(3)は共同研究者4名のほか、日本史学・東洋美術史学・考古学専修の院生5名、計9名を想定している。(4)は共同研究者5名のほか、日本史学・東洋美術史学・考古学専修の院生5名、計10名を想定している。

このほか、①共同研究者である浅漱毅氏が本学でおこなう例会・調査打ち合わせに参加する際に必要となる交通費（2回を想定）、②研究に必要となる、古代出雲を中心とする図書購入費25千円、③文具などの消耗品1千円を計上する。

研究組織

氏名	年齢	所属機関・部局・職名	専門分野
市 大樹	41	文学研究科・准教授	日本古代史
藤岡 穣	40	文学研究科・教授	東洋美術史
高橋照彦	45	文学研究科・准教授	考古学
中久保辰夫	29	文学研究科・助教	考古学
淺漱 豪	47	独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・研究員	東洋美術史

※1行目に研究代表者（申請者）を記入してください。

※本学関係者については所属機関（「大阪大学」）は省略してください。

研究スケジュール

時期	内容
7月	第1回月例会、京都国立博物館での文物の調査
8月	第2回月例会
9月	第3回月例会
10月	第4回月例会
11月	第5回月例会、出雲地域（島根県）の現地調査
12月	特別例会
1月	第6回月例会
2月	第7回月例会
3月	第8回月例会

研究経費の内訳 (単位: 千円)

費目	内容	小計
物品費	設備備品費 古代出雲を中心とする図書購入費	25千円
	消耗品費 文具、複写代など	1千円
旅費	国内旅費 出雲への出張旅費・宿泊費 (40千円×10人)、出雲出張にともなうレンタカ一代金 (8千円×2)、京都国立博物館への出張旅費 (1.2千円×9人)、淺瀬毅氏の大坂大学への出張旅費 (1.2千円×1回)	428千円
	外国旅費 なし	0千円
謝金	講演謝金等 特別例会での講演料	20千円
	アルバイト 謝金等 なし	0千円
その他	印刷製本費 なし	0千円
	その他 博物館の参観料 (京都国立博物館 1.3千円×9人)、古代出雲歴史博物館 (0.6千円×10人)、荒神谷博物館 (0.5千円×10人)、八雲立つ風土記の丘資料館 0.3千円×10人) の参観料。	26千円
合 計		500千円

外部資金応募・獲得状況 (最近5年間のものまたは応募予定のもの)

外部資金の名称と研究期間	研究課題名・研究代表者氏名	全研究期間の総研究費(単位:千円)	採否	本申請との関連性
科学研究費 (基盤研究A)・平成21~24年度	科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究・藤岡穣	33540千円	採	美術史を主体とした研究ながら、本研究と同様、考古学との領域横断的な研究を目指したものであり、本研究を申請するきっかけともなっている。
科学研究費 (基盤研究C)・平成22~24年度	木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較による日本古代文書論の再構築・市大樹	2730千円	採	本研究の重要な視点として、書写材料としての木と紙の違いに注目しており、本研究を着想する最初のきっかけとなった。
科学研究費 (基盤研究B)・平成24~27年度	日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究・高橋照彦	18696千円	採	考古学と文献史学などの協業によって日本古代手工業生産の解明をめざしたもので、本申請とも関係が深いが、美術史との協業を含んでいない。
科学研究費 (基盤研究A)・平成25~28年度応募予定	日韓共同による東アジアの金銅仏に関する文理融合的研究	45000千円		上記「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」とともに本研究を準備段階の研究と位置づけて申請する。